OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	総合大学なのにもったいない！阪大生は医療の多職種連携をどう学ぶべきか？
Author(s)	吉本, 台
Citation	平成27年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2016
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54646
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

申請先学部　医学部医学科
採択番号　　No.2

平成 27 年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな 氏　　名	よしもと　うてな 吉元　台	学部 学科	医学部 医学科	学年	1年
ふりがな 共　同 研究者名	うえの　ゆみこ 上野　裕美子	学部 学科	医学部 医学科	学年	1年
					年

アドバイザー教員 氏名	杉本　研	所属	医学系研究科

研究課題名	**総合大学なのにもったいない！阪大生は医療の多職種連携をどう学ぶべきか？**
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。

・はじめに

現在、医療は大きく発展していっており、治療法も複雑なものになっている。そのような状況で、異なる分野の専門家が分野の垣根を越えて連携することがますます必要性を増している。

しかし、その多職種連携は、やろうと思っても一朝一夕でできるものではない。なぜなら、他職種に対するある程度の理解や、他職種の人々の考え方などを知っていないといけないからである。私たちは、今何気なく過ごしている大学こそが、その多職種連携の土台となる、相互理解が最もしやすい環境であると考えた。異なる職種を学ぶ学生どうしが非常に近い距離にいて、友人という間柄で、気軽に他職種の考え方を共有できる環境が大学にはあるのだ。

ところが、実際に医療系学部の学生の話を聞いてみると、あまり他学部との交流がないようである。これでは実にもったいない。そこで私たちは、大阪大学の様々な学年の医療系学生に対して、多職種連携に関するアンケートを行い、その実態を知ろうと考えた。そうすれば、これから先、大学において他学部間交流の機会を増やすための大きな手がかりが見つかるかもしれない。本稿では、そのアンケート結果と、そこから導かれる大学の今後あるべき姿を報告する。

・対象

大阪大学の医療系学部、医学部医学科・医学部保健学科・歯学部・薬学部で学ぶ、1年生から5年生までの学生、500 人

・方法

まず、現在の状況で多職種連携に関するアンケートを行う。それから、多職種について深く知ることができるイベント、「医療トーク」を開催し、それに参加した、医療系学生の多職種連携に対しての意識の変化に関するアンケートを再度実施する。回答は無記名とし、最後に回答者個人の考えを自由記入してもらった。

・結果と考察

・アンケートの内容

1.多職種連携という言葉を聞いたことがあるか
2.多職種連携を理解しているか
3.多職種連携を重要だと思うか
4.大学の授業などで多職種連携について理解する機会はあるか
5.他の医療職の役割を理解しているか
6.他の医療職の役割への理解を深めたいか
7.他の医療系学部学科について理解しているか
8.他の医療系学部学科の学生と関わりを持つ機会はあるか
9.他の医療系学部学科の学生と今よりも関わりを持ちたいか

・全体の傾向

結果を次の**図１**に示す。

まず、多職種連携という言葉の認知度は４分の３ほどにものぼった。そして多職種連携の意味を説明した上で、それが重要だと思うかという質問に対しては、多くの学生が重要だと思っているという結果になった。多職種連携への理解は進んでいるわけではないが、重要であるという認識はあるようだ。加えて、他の医療職の役割への理解はあまりすすんでいないが、理解を深めたいとは思う、また、他の医療系学部学科についてあまり理解はしていないが、今よりも関わりを持ちたい、のように多職種について、より理解したいという意欲は学生全体に共通であるようだ。しかし、その機会が与えられていないのが現状である。

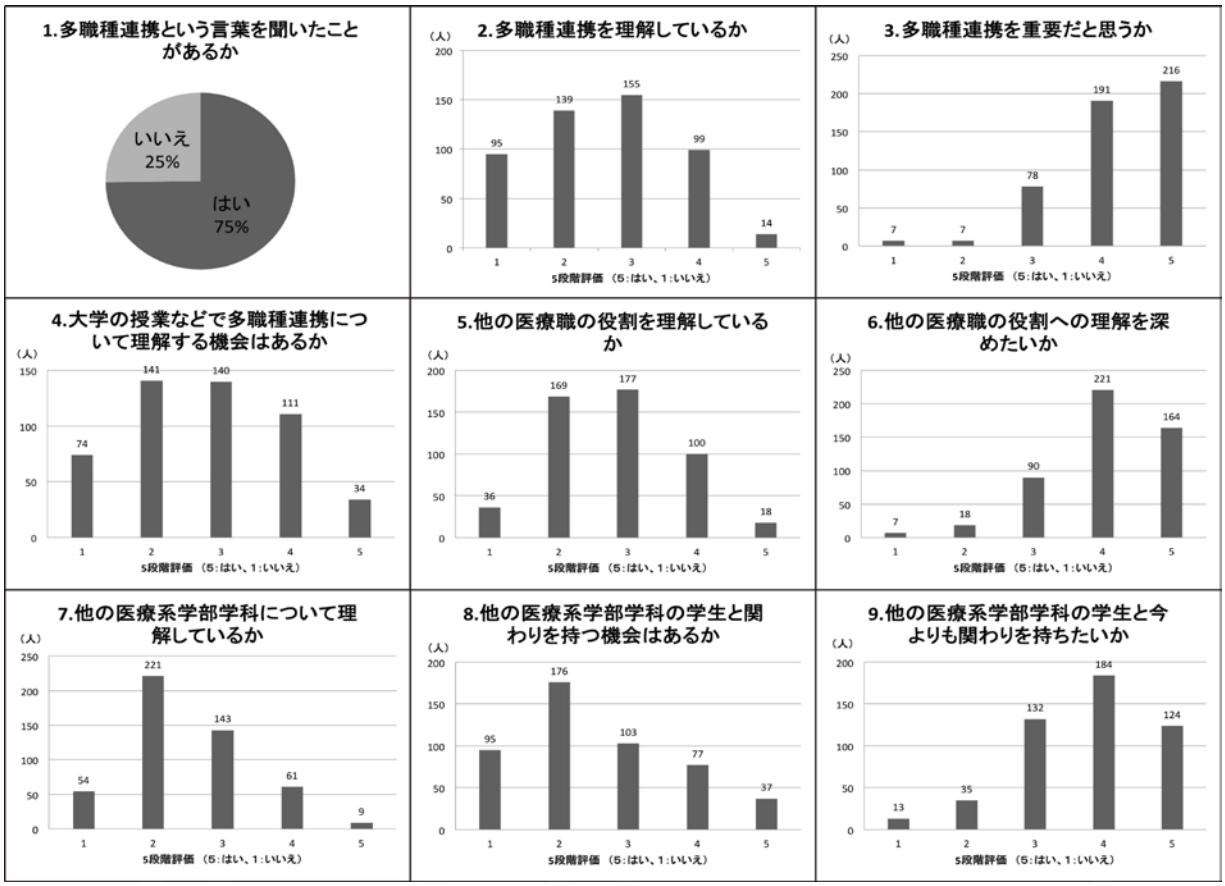

図１　全体のアンケート結果

・学年における違い

医学科１年、４年、５年を例に見てみる(**図１**)。多職種連携に対する認知度、理解度はともに学年が上がるにつれて上がっていっているのが分かる。それに、その重要性に対する認識はどの学年においても共通なようである。

また、それを理解する機会は、単純に臨床系医療の授業が増えるからであるのか、学年が増すにつれて増えていっているようである。他の項目においては、顕著な差異は見られない。全体的に意識についてはどの学年でも共通なようである。

・学部学科間の違い

歯学部、薬学部では多職種連携に対する認知度、理解度が比較的低いようである。一方、保健学科は比較的高い。職業の特性による違いなのかもしれない。(**図２**)

・意識の変化

医療トーク後の感想を**表２**に示す。

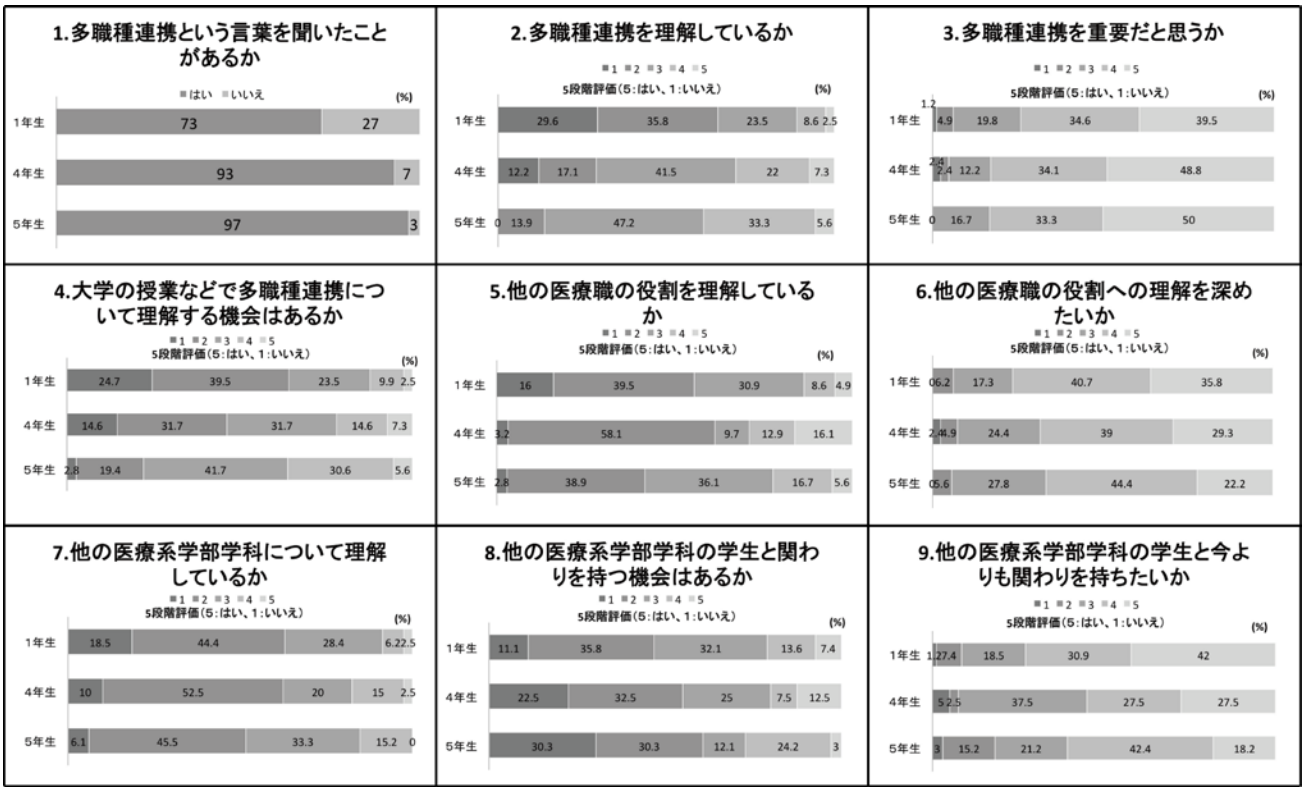

図２　学年別アンケート結果とその比較

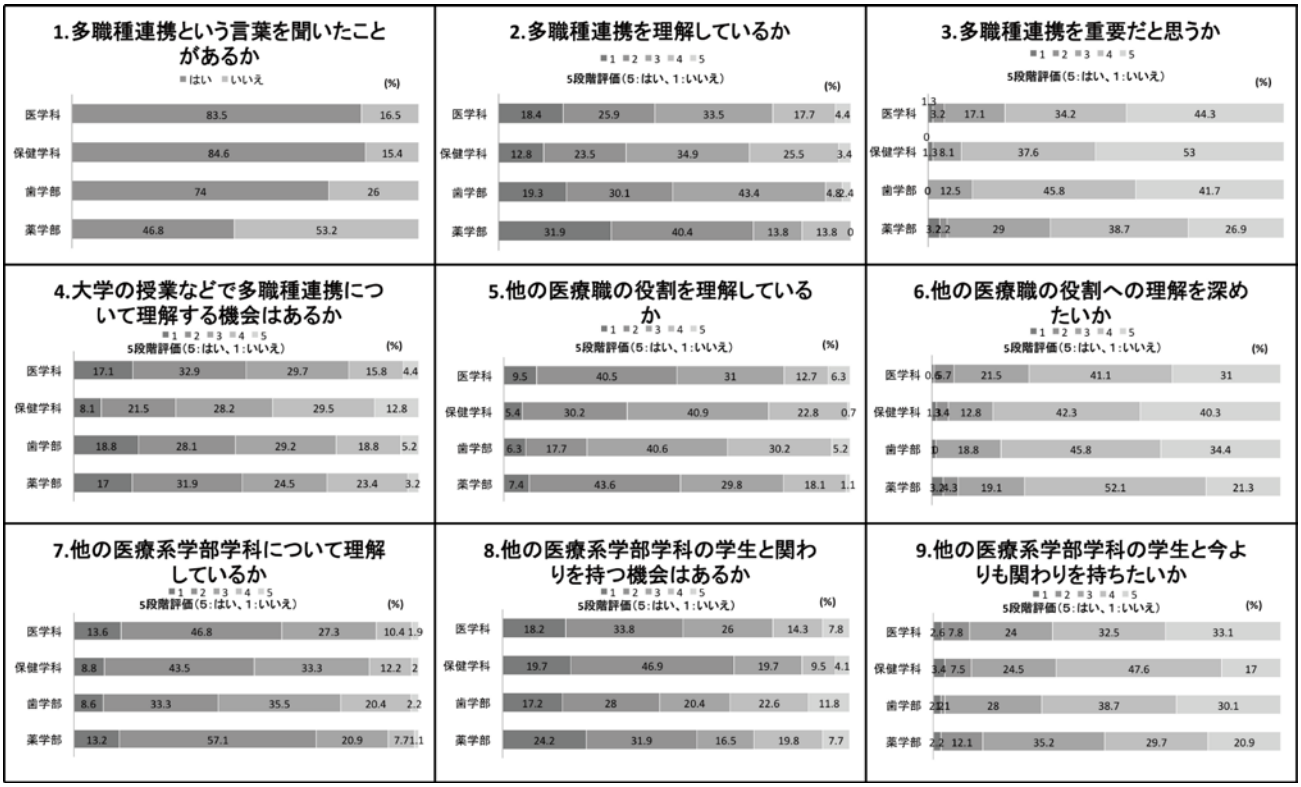

図３　学部学科別アンケート結果とその比較

・**自由意見**

主な自由意見を**表２**に示す。多様な意見を頂いたことに心から感謝したい。

・**まとめ**

多職種のことを理解すべきだという意識はどの学生にも共通であるようだ。しかし、その機会はあまり与えられていない。学校のカリキュラムとして、他学部他学科の生徒と交流できる機会を作ったり、イベントなどによって、交流の場を用意したりすることが今後の課題と言える。また、学部学科によって、多職種連携の認知度にばらつきがあったので、大学全体で、その認知度を上げる働きをしなければならない。

表１　医療トーク後の感想

今まで全くと言っていいほど知らなかった領域について知ることが出来たから。医療の現在について知れた。
医療だけでなく福祉の人がもっと参加すると面白いと思う。
医療トークのようなまじめに学ぶ機会でもよいし、まずは互いの職種を知ることが大事ということで多職種パーティーを開催するのもよいと思う。次回の勉強会は規模を拡大したい。50 人以上。
医療における多職種連携について、これまでネットの知識しかなかったので実際に医療に従事されている方からお話を聞けて貴重な経験だった。
いろんな職種について理解できた。
同じ大学だけでなく他大学の医療系学部の人たちとも話せる機会があるといいと思う。

教養課程において学部横断のクラス、時間割編成を行う。実習のころに学生だけでチーム医療を行う。
実習に行った病院の仕組みを理解したことで深めることが出来たと思う。
多職種連携という言葉は聞いていたが実際の現状の話を聞けて勉強になった。
普段の授業では医療関係者と話す機会がないので良かった。
もっとほかの職種に方の話を聞きたいと思う。

表２　自由意見

「チーム医療」を感じる場がほしい。
医学科や薬学部の方と会うことがほとんどないので合同授業や医療問題についてのデスカッションの授業があれば学生のうちから多職種連携を学べると思う。
医学部は医学部内の部活動を頑張っているが、全学の部活動と合併したら、自然といろいろな学部と知り合えてよいと思う。
医師は多職種の協力なしには成り立たない職業だと思うので、もっと他学部を理解する機会があってもよいと思う。
医療系学部に限らず、また文理を問わず様々な学部の人との交流が良い刺激になると思う。
医療現場では、各職種の仕事内容が専門化、細分化されているため、学生のうちに授業などでほかの学部や専攻の人と交流の機会がないことは非常に残念に思います。
医療サービスの効率化のためにチーム医療は重要だと思う。
医療従事者のみでなく、心理職や介護職との連携も重要になってくるかと考えています。
医療において非常に重要なことだから、学生のうちから関わりを持てるのはいいことだと思う。
学年が上がると他学部と接する機会がまるでないので何らかの交流はしたいと思う。
学問をその分野内にとどめると発展が滞ってしまうので他学部と連携して互いに高めあっていくことで視野も広がり、新たな展望が開けてゆくと思う。
学校の建物が別になっていることが障壁になっているかもしれない。
患者さんの受けられる医療のレベル向上のためにも多職種が平等に意見を言い合えることが必要だと思う。
現状では他学部の仕事を知る機会があまりない
今後医療が発展していくために、多職種連携が必要だと思うが、現在の社会では十分に進んでいない。最高の学問機関として、大学は多職種連携を推進していく役割を担うことが求められている。
せっかく総合大学に入ったのに他学部のことをなかなか知れていない。大学だから自分で機会を求めていかなければならないのは分かっていながら全然実行できていない。
それぞれの職種の個々の能力を上げることでお互いの職種を尊重し、より連携がしやすいと思う。
大学の講義、実習を通して他学部の方と協調して学ぶ機会があったら、社会に出てから役に立つと思う。
大切と思っているが、それをする機会がないのが現状である。
他学部でどのようなことを勉強するかについては興味がある。
他学部と合同でデスカッションする授業があればいいと思う。
他学部との交流の機会を学校側が提供してくれたら嬉しいです。
他学部の方ともっと交流すべきだと思う。
他学部の研究室にいる身としてはまだまだ医学部などと連携できる段階にないと思うため、あまり必要性

を感じない。
他学部の人ともっと親交を深めて将来的に助け合えるようになりたい。
他学部を理解するには他学部との交流をもっとおこなうべきである。
確かに重要ではあるが、学生のうちから理解を深めることが、形式上のふれあいなどで終わってしまっては無意味だと思う
多職種連携が重要なのは理解しているし、他学部との交流を持ちたいと思う。しかし、自分の専攻についてよく学ぶことが先決だと思う。
多職種連携という言葉はまだまだ浸透していない。今後、授業などを通してさらに多くの人に理解を深めてもらうことが求められる。
多職種連携や他学部理解を深めることは重要だが、まずは自分の専攻を極めることが優先されるべきだ。
多職種連携をすることは質の高い医療を提供するのに必要である。
阪大内の他の医療系学生と関わりを持つことはもちろん、阪大にはない、PT,OT,ST などの人とも関わりたいと感じている。
他の医療系専攻（保健、歯、薬）とは、サークルで交流することができるが、連携の授業、実習があまりないため、医療の時おける多職種連携における理解が物足りないかもしれない。
学ぶ機会を増やしより理解を広め医療の幅を広げていくべきだと思う。
薬学部は現状として他の医療系学部から少し孤立しているように感じる。社会の仕組みや医療現場の状況が学部での学びにも影響しているとおもう。